

## 協働型目標自己評価結果（保護者）

### 1 提出数（実家庭数の69%）

学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
提出家庭数	151	34	27	20	29	22

兄弟姉妹は下の学年（実家庭の基準学年）でカウントしています。

### 2 家庭での取組

A よくできた， B できた， C もう少し， D できなかった

笑顔で，先に，顔を見てあいさつができる児童				
自 己 評 価（家庭ではどうだったか）	A	B	C	D
子どもが自分から進んでよいあいさつをした時は，いっぱいほめた。	27	81	37	6
	18%	53%	25%	4%

### 3 子供の変容（自由記述）

知り合いの大人に進んではきはきとあいさつができるようになった。  
 あいさつだけでなく，話すときも相手の目を見てきちんと会話ができるようになってきた。  
 今まで通りあいさつをしている。  
 地域の人にもきちんといあいさつができるようになった。  
 地域の方にあいさつをするようになった。  
 特にお客さんにはいい声であいさつができるようになった。  
 朝から明るいあいさつができて，笑顔で一日が始まる感じがする。  
 自然に生活の中で当たり前にあいさつの言葉が出るようになった。  
 明るく人に接することができるようになった。  
 声がけを多くすることで，子供たちからの声も多くなったのでは。  
 コミュニケーションをとれる時間が増えたように思う。  
 自分から地域の方にも積極的にあいさつするようになった。  
 積極的に人に声をかけることで，ほめられたり，話しかけられたりして，人とのつながりを感じる事ができた。弟もその姿勢をまねて自らあいさつすることができ，とてもよい影響があった。  
 ようやく学校・地域の方に慣れてきたようで，「元気にあいさつしていましたよ。」と教えていただくこともあったので，ほっとしている。  
 八木山南の保護者だけでなく，地域の方にも自分からあいさつをするようになった。  
 元気に活動している。

家庭でもあいさつは大事だと分かり、友達同士、家庭以外でもあいさつができるようになった。まだ声は小さいけれども。

親が声がけしなくても、自分から忘れずにあいさつするようになった。

あいさつしようと意識することができていたと思う。

家の中でも、地域の人たちにも積極的にあいさつをするようになった。恥ずかしがるときもあるが、できたときはたくさんほめたいと思う。

家ではあいさつが毎日普通にでき、習慣になった。そのことにより、気持ちよく過ごすことができるようになった。

目上の人に先ず自分からあいさつや「ありがとう」を言えるようになった。

通学路の途中で近所の方に自分からあいさつができるようになっていた。以前は迷いが見られたが、今は大人よりも先にあいさつをしている。

3年生になってから、爽やかなあいさつをご近所の方々にもできるようになった。とてもうれしく思う。

人の話を聞くときに、相手の顔を見て聞いている。

親に催促されなくても、感謝の言葉を言えるようになった。

家庭内ではよくあいさつし、コミュニケーションがとれていると感じている。

家族であいさつすることが習慣付いた気がする。

家庭内では進んであいさつをする姿が見られる。協働目標ということで、子供も、家庭でも、地域でも、意識してあいさつしようと努力している姿が見られる。1年生は気分のむらもまだあり、できる日とできない日がある。これは、今後の家庭内での課題だと思っている。

本当は子供の方からあいさつができるといい。親も手本を見せたいと思い、率先してあいさつしてみた。家庭では自然にあいさつができつつあるように思う。子供の方からあいさつができたなら、今後もほめるように努めたいと思う。家庭の外では他の人にけっこうあいさつしているようで、近所の方がそのことを話してくれた。

親がいつもより丁寧なあいさつを心がけたら、子供も丁寧にあいさつをするようになった。

自分で気をつけて、進んであいさつをしていた。

自分から進んであいさつをするようになった。

自分からあいさつをするようになった。まだ笑顔は出せないようだ。

以前よりできるようになった。

以前よりはあいさつができるようになった。

大きな声であいさつができるようになってきた。

少しずつ大きな声であいさつができるようになってきた。

少しずつだがよいあいさつができるようになってきた。

子供の方から進んであいさつをするようになったと思う。

少し恥ずかしがりながらも、近所の人に会えばあいさつができるようになってきた。

恥ずかしがって言えなかったのが、言えるようになってきた。

(いっぱいほめたら)よく笑うようになった。

1年生も後半になり、かなり環境にも慣れ、顔見知りも増えた。そのおかげで、自分からきちんとあいさつができるようになってきた。少しずつ顔も見られるようになってきた。

朝起きたらすぐにあいさつをしてくれるようになった。

朝起きて2階から下りてくるときは、だいたい「おはよう」と言いながら下りてくる。

朝起きて「おはよう」、学校から帰ってきて「ただいま」と言えるようになってきた。(ときどき忘れるが・・・)

家では元気よくあいさつができるようになったが、外に出るとまだできないようだ。

よその家に行っても、ちゃんとあいさつができるようになった。以前は促さないと言わなかった。

朝は相変わらずボーッとしているので、なかなか先にはいかないが、以前よりスムーズにあいさつができています。

「先に」というのができなかった気がする。あいさつをすると返してくれるようにはなっている。少しずつうまくできるようになってほしいと思っている。

もっとほめていたなら変わっていたと思う。

家庭では当たり前なことなので、取り立ててほめることはしていない。

あまり意識してやってこなかったもので、これからがんばりたい。

あまり意識して取り組むことができなかった。

朝のあいさつは一度言えば、何回も繰り返しいろいろな方にすることはない、「面倒だ」という様子だった。でも、家族の中で同じことの繰り返しや、積み重ねることが大切なんだということを伝えてきた。今は少しずつ自分からあいさつをしているようだ。

地区巡視等でたくさんの児童に会うが、自分からあいさつする児童はとても少ない。

自分の子も、他の子たちも、あいさつをするようになったという変化を感じない。

まだ特に変わったところはない。

#### 4 家庭でのあいさつの様子（授業参観後の懇談会より）

恥ずかしがり屋なので言えたときはほめてあげるようにした。

ほかのお母さんからほめられて、ほかではちゃんとやっているんだなあと分かった。

うながす、ほめるなどして言えるようにしている。

ここ何か月かは、知らない人にもあいさつするようになり驚いている。

朝家族にはしっかりあいさつするが近所の人にはまだできない。

『笑顔で』『自分から』とまではいかないが決まったあいさつはよくできている。

子どものあいさつをほめるのが足りないと反省している。

地域の人にあつた時は、親が進んであいさつして、いっしょにあいさつできるようにしている。1人ではできていないようだ。

家に遊びに来た子どもたちには、「おじゃまします」等きちんと言わせるようにしている。よく言えるようになってきた。

朝起きたときは、明るい声で子どもに声をかけるようにしている。

あいさつが返ってくるまで繰り返し声をかけるようにしている。

黄色いジャンパーを着て登下校を見守っていると子どもたちはあいさつしてくれる高学年は恥ずかしさがあるのか、声は小さい。

よその子の方がほめやすいので、機会あるごとにほめていきたい。

学校に行ったときによくあいさつされる。

通学路で元気にあいさつしてくれる子が増えた。

家では自然にあいさつを交わしている。

元気に顔を見てあいさつができるようになった。

#### 5 考察

(1) 昨年度（ ）と今年度（上述）の保護者の自己評価との比較

あいさつのルールを家庭で決めて、実行した。（A・Bで78%）

あいさつができた時は、ほめてあげた。（A・Bで75%）

今年度の自己評価（A・Bで71%）の項目の数字と比べて昨年度の数字が高いのは、昨年度の評価項目のハードルが低いために肯定的な評価が高い割合を示したと思われる。今年度は自己評価の「子どもが自分から進んでよいあいさつをした時は」という文言を考慮しての評価と読み取ることができる。（A・Bで71%）

(2) 今年度の 自由記述から

自由記述は150提出の中の59で、そのうち子どもの変容を大きなプラスと捉えているものが49で、そのうち24は「あいさつができるようになった」という内容の記述である。概ね2年間の取組を評価していると考えられる。一方で、「家庭の外では他の人にけっこうあいさつしているようで、近所の方がそのことを話してくれた。」という記述があった。地域の中での子どものあいさつは親の目に入りにくい部分もある。保護者の評価が家庭内に偏っている可能性も考えられる。

「自分からあいさつする児童はとても少ない」、「あいさつをするようになったという変化を感じない」という記述もあり、相手や場によって躊躇してしまったり、意識化が十分でなかったりする場面があることが分かる。

(3) 今年度の 教職員の自己評価から

よいあいさつができた児童はその場でほめる。(A・Bで73%)

帰りの会で、今日のあいさつの取組を振り返らせる。(A0%・B36%)

児童会の朝のあいさつ運動を増やし、「おはようございます」が響き合う学校にする。(A0%・B69%)

学校だよりやPTA、地域の会合であいさつの取組を話題にするように依頼する。(A・Bで60%)

よいあいさつについては、その場で認め、ほめる取組はできているが、については評価が厳しい。教職員が率先してあいさつをすることや、あいさつが不十分なときにその場・その場で声かけや指導をすることが重要である。帰りの会で日々総括することは徹底できていない。

一方で、「あいさつが強制的、義務的なものにならないように配慮したい。優しく背中を押すように言えるように促したい。」という意見もあり、自然にあいさつが響くような雰囲気醸成したいとも考える。

(4) 児童の評価(振り返りカード「かしこく」「やさしく」「たくましく」点検表)

- ・資料にあるように6回の点検中4回、ベスト3になっている。その他の2回を含め、毎回90%以上の児童が「できた」と自己評価している。

(5) 今後の課題

「あいさつができる」ということの基盤はコミュニケーションがしっかりとれるようになることであるが、今は二極化が進んでいるのではないだろうか。

- ・学校は言語活動の充実を心がけ、言葉を大切にし、言葉を介して授業を進める。
- ・家庭は、「こういう子どもに育てたい」ということを念頭に置き、子どもから聞き取り、子どもの言葉を引き出す会話や団らんを心がける。ホテル家族(ホテルの通路をすれ違うように全く言葉を交わさない家族)にならないようにする。
- ・あまり地域・地域と意識し過ぎると、目標値の設定が難しくなる面があるが、地域との連携をどう進めていくのか、学校の地域連携担当者の活かし方を考える。

三者が実情を共有するための情報の提示の仕方を考えなければ、三者協働の目標にならないのではないだろうか。

- ・学級懇談にこない保護者、PTA 行事にこない保護者に対してどう働きかけていくか。
- ・防犯巡視ボランティアやゲストティーチャーの方々の協力をいただくだけでなく、地域の他の方々をどう取り込んでいくか。